

僕は後悔していない

「いつも、帰り、駅で、立ってて、待ってるように見えたけど、誰か待ってたの？ 友達？」と尋ねると、彼女は、笑みを浮かべながら、うなづいた。

小学校からの友達で、名前が山田とか言っていて、大の仲良しで、今回も、僕のこと、その女性に打ち明けて相談したと言う。

その子の入れ知恵で、彼女が慎重な態度に出たような印象を受けた。僕は一瞬その山田とか言う女友達が憎くなった。

僕が充分体力を取り戻すには充分な時間だった。椅子にすわっているうちに、体の疲れが取れていくのを感じた。

彼女の後ろに、その女性が、蜘蛛の様に、まったり付いているのを、僕は想像した。しかし、話しているうちに、どうも、それだけでは、ない様だ。

彼女と「付き合う」なんて、そんな、大人の真似は、彼女の家の状況を見ても、到底、無理な印象を受けた。お父さんは、お寺の住職で、かつ、家の前の保育園の園長でもあり、町では、お寺のお坊さんとして、また、保育園など、教育に携わる教育者として、尊敬されている。彼女の後ろに、蜘蛛が、いっぱい、まったりついている姿を想像した。

そんな家のきびしい状況で、僕は手紙に、「付き合ってください。」と書いた。「あれはまずかった。」と思うようになった。